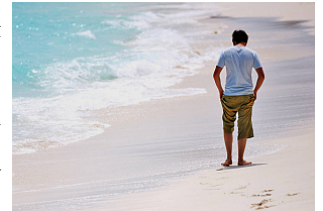


I. 導入

おはようございます。先週のメッセージを振り返りましょう。パウロが復活の話題に人々の注意を集めると、ユダヤ人の議会である最高法院は大混乱に陥りました。ファリサイ派は旧約聖書にある復活の約束を信じていましたが、サドカイ派は信じていませんでした。意見が分かれた議会は乱闘となりました。千人隊長はパウロの命を守るため、アントニア要塞の兵営に連れ戻さなければなりませんでした。この時点で、パウロは自分がこれからどうなるのか自分で決めることはできませんでした。パウロの行く末は最高法院と千人隊長次第だと、人の目には映ったでしょう。しかし実際には、パウロの将来は神の御手の中にありました。人の手によって左右されるものではありません。



以前、まじめな日本人青年と話していて、なぜイエスを信じる決心をしたのか尋ねました。その青年は、箴言16:9のみことばが彼の人生を変えたと答えてくれました。「人間の心は自分の道を計画する。主が一步一步を備えてくださる。」誰もが将来の計画を立てますし、何でも自分で決めているのだと思いがちです。一方で、主がすべての主権者であることを認めるなら、私たちの人生は変わります。



今日の聖書箇所を読むと、ユダヤ人とローマ人がパウロの処遇を目論んだことがわかります。同時に、目に見えない神の御手がすべてをとりまとめられる様が見て取れるのではないのでしょうか。誰でも計画を立てます。しかし、決めるのは主です。使徒23:12-22を読んで、その後のできごとを見ていきましょう。

II. 聖書朗読 (使徒言行録23:12-22, 新共同訳)

23:12 夜が明けると、ユダヤ人たちは陰謀をたくらみ、パウロを殺すまでは飲み食いしないという誓いを立てた。 23:13 このたくらみに加わった者は、四十人以上もいた。 23:14 彼らは、祭司長たちや長老たちのところへ行つて、こう言った。「わたしたちは、パウロを殺すまでは何も食べないと、固く誓いました。 23:15 ですから今、パウロについてもっと詳しく調べるといふ口実を設けて、彼をあなたがたのところへ連れて来るように、最高法院と組んで千人隊長に願い出てください。わたしたちは、彼がここへ来る前に殺してしまう手はずを整えています。」 23:16 しかし、この陰謀をパウロの姉妹の子が聞き込み、兵営の中に入って来て、パウロに知らせた。 23:17 それで、パウロは百人隊長の一人を呼んで言った。「この若者を千人隊長のところへ連れて行ってください。何か知らせることがあるそうです。」

23:18 そこで百人隊長は、若者を千人隊長のもとに連れて行き、こう言った。「囚人パウ

口がわたしを呼んで、この若者をこちらに連れて来るようにと頼みました。何か話したいことがあるそうです。」 23:19 千人隊長は、若者の手を取って人のいない所へ行き、「知らせたいこととは何か」と尋ねた。 23:20 若者は言った。「ユダヤ人たちは、パウロのことをもっと詳しく調べるといふ口実で、明日パウロを最高法院に連れて来るようにと、あなたに願い出ることに決めています。 23:21 どうか、彼らの言いなりにならないでください。彼らのうち四十人以上が、パウロを殺すまでは飲み食いしないと誓い、陰謀をたくらんでいるのです。そして、今その手はずを整えて、御承諾を待っているのです。」 23:22 そこで千人隊長は、「このことをわたしに知らせたとは、だれにも言うな」と命じて、若者を帰した。

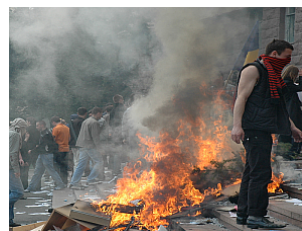
III. 教え

40人もの人が、パウロを殺すまでは飲み食いしないと誓いを立てました。その陰謀を耳にしたパウロの甥は、このことをパウロに話しました。また、パウロに促され、千人隊長にも同じことを報告しました。パウロの甥がなぜエルサレムにいて、この陰謀を知ったのかはわかりません。これまでの学びから、パウロが少年時代にガマリエルの弟子として学んだことはわかっています。ガマリエルは著名な教師であり、最高法院の一員でした。ですから、パウロの甥も同様にエルサレムの優秀な教師のもとで学び、このような噂を耳にする状況にあったのかもしれませんが。いずれにせよ、陰謀を企てた40人と最高法院の70人はこのことを知っていました。100人以上の人が知っているなら、その秘密が人に知れるのはもはや時間の問題です。



パウロはこの企てから助け出されて、いずれローマに行き、主の復活を証します。主はすでにそうお決めになって、パウロにそう告げられました。では、パウロを殺すまで飲み食いしないと誓いを立てた40人の人はどうなったのでしょうか。脱水で死んでしまったのでしょうか。聖書は彼らがどうなったか記していません。ユダヤ律法の研究者によると、当時の教師たちは、到底守れない無謀な誓いを立てた人のために、その誓いから解かれる方法を提示していたそうです。それは、自分の誤りを認めて神殿にささげものをささげるというものでした。おそらくこの40人は、数日間空腹を耐え、恥を偲んで自らの誤りを認めてささげものをささげる以外には、何の損失もなかったでしょう。もしかすると、この経験でパウロのメッセージに対する敵対心を考え直したかもしれません。パウロのメッセージとは、神の愛が十字架とイエスの復活によって証明されたというものです。

この40人の胸中を察してみましよう。彼らは、パウロを殺すという誓いを立てることで神に仕えていると思っていたに違いありません。最高法院もこの陰謀に参加しようとしていました。殺人を企てることは明らかに神のみこころに反します。このような企てを神が喜ばれるなどと、なぜ彼らは思ったのでしょうか。高慢が彼らの目をくらまし、怒りに惑わされたのです。プライドは人を盲目にします。怒りは人を欺きます。世界中で、プライドと怒りが日々、人を非道な行いに向かわせています。



私たちは心を守らなければなりません。慢心から軽はずみな発言をしたり、怒りに任せて行動したりしないようにしましょう。ヤコブ1:19-20はこう教えます。「1:19 わたしの愛する兄弟たち、よくわきまえていなさい。だれでも、聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい。1:20 人の怒りは神の義を実現しないからです。」誰でもプライドがありますし、腹立たしいことも多々あります。私自身も常にプライドや怒りと戦っています。怒るだけの正当な理由があると思っても、謙虚になって、怒りは義を実現しないことを思い出しましょう。プライドや怒りが私たちを神のみこころに近づけてくれることはありません。イエスに近づきたいと思うなら、へりくだりと平安の道を選ぶ必要があります。

殺人を企てた人々は悪者だと決めるのは簡単です。パウロなら、彼らのことを何と言うと思いますか。その答えはすでにローマ10:2にあると思います。「わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。」パウロはエルサレムに到着する前にこれを書きましたが、この場合にも当てはまると思います。パウロが繰り返し言ったように、パウロもイエスと出会う前は熱心だったけれども正しい認識を欠いていました。この40人がイエスを知り、十字架で注がれた神の愛を知っていたなら、おそらくまったく違った行動をしていたでしょう。つまり、彼らは神のみこころをわかっていなかったのです。私たちも無知な行いをしないように気をつけなければなりません。すべてにおいて、イエスと神のみこころを知ることを求める必要があります。

使徒23章の続きを読む前に、使徒23:16をもう一度見てみたいと思います。「しかし、この陰謀をパウロの姉妹の子が聞き込み、兵営の中に入って来て、パウロに知らせた。」この若者が叔父パウロに身の危険を知らせようとエルサレムの街を走る姿が目には浮かぶようです。19節で、千人隊長が若者の手を取ったとあることから、おそらくまだ幼い12歳くらいの少年だったのではないかと想像できます。この男の子はたいそうな勇気の持ち主です。自分の聞いた内容を知らせることで、命の危険を冒しているとわかっていたはずですが。

この個所は、パウロの家族関係に関する数少ない記録です。使徒たちの家族について聖書にはあまり記載がありませんが、私たちと同様、使徒たちにも家族がいたことを忘れてはなりません。皆、父母や兄弟姉妹がいました。妻子のある使徒もいました。パウロはこのことに触れ、コリント第一9:5で次のように言いました。「わたしたちには、他の使徒たちや主の兄弟たちやケファのように、信者である妻を連れて歩く権利がないのですか。」

この個所から、使徒たちには家庭があったことがわかります。私たちはこのことを時折忘れてしまいます。使徒に家族がいたことや、家族がどんな犠牲を払ったかを思い出す必要があります。使徒たちとその家族はごく普通の人々でした。彼らは、主によって特命に召され、その召しに応じました。大きな犠牲を払ってもです。私たちも、このような愛と献身をもって主に仕える者になれるでしょうか。

では、使徒23:23-35を読みましょう。

IV. 聖書朗読(使徒言行録23:23-35, 新共同訳)

23:23 千人隊長は百人隊長二人を呼び、「今夜九時カイサリアへ出発できるように、歩兵二百名、騎兵七十名、補助兵二百名を準備せよ」と言った。23:24 また、馬を用意し、パウロを乗せて、総督フェリクスのもとへ無事に護送するように命じ、23:25 次のような内容の手紙を書いた。23:26 「クラウディウス・リシアが総督フェリクス閣下に御挨拶申し上げます。23:27 この者がユダヤ人に捕らえられ、殺されようとしていたのを、わたしは兵士たちを率いて救い出しました。ローマ帝国の市民権を持つ者であることが分かったからです。23:28 そして、告発されている理由を知ろうとして、最高法院に連行しました。23:29 ところが、彼が告発されているのは、ユダヤ人の律法に関する問題であって、死刑や投獄に相当する理由はないことが分かりました。23:30 しかし、この者に対する陰謀があるという報告を受けましたので、直ちに閣下のもとに護送いたします。告発人たちには、この者に関する件を閣下に訴え出るようにと、命じておきました。」

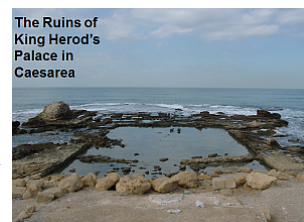
23:31 さて、歩兵たちは、命令どおりにパウロを引き取って、夜のうちにアンティパトリスまで連れて行き、23:32 翌日、騎兵たちに護送を任せて兵営へ戻った。23:33 騎兵たちはカイサリアに到着すると、手紙を総督に届け、パウロを引き渡した。23:34 総督は手紙を読んでから、パウロがどの州の出身であるかを尋ね、キリキア州の出身だと分かると、23:35 「お前を告発する者たちが到着してから、尋問することにする」と言った。そして、ヘロデの官邸にパウロを留置しておくように命じた。

V. 教え

千人隊長クラウディウス・リシアは、パウロに対する陰謀の知らせに想像以上の対応をしました。その夜のうちに、パウロを護送したのです。衛兵の数は470人で、部下の半数に上る人数でした。40人のユダヤ人がパウロを殺すことを誓いましたが、千人隊長はその10倍の人数を投入してパウロを護衛しました。千人隊長はパウロの身の安全も保証しましたが、それは自分のためでもありました。自分の捕らえていたローマ市民をユダヤ人に殺されたとなると、彼にも厳しい罰が及ぶからです。



パウロを護送することで、千人隊長はパウロの処遇問題を他の人に任せました。パウロは、当時のユダヤ総督フェリクスのもとへ護送されることになりました。このとき、総督の職務室は、元々ヘロデ王の官邸として建てられた建物の中にありました。今もカイサリアの海岸に、官邸の基礎部分の遺跡が残っています（写真）。



千人隊長は、状況を説明する手紙を添えました。使徒23:25-27 「23:25 次のような内容の手紙を書いた。23:26 『クラウディウス・リシアが総督フェリクス閣下に御挨拶申し上げます。23:27 この者がユダヤ人に捕らえられ、殺されようとしていたのを、わたしは兵士たちを率いて救い出しました。ローマ帝国の市民権を持つ者であることが分かったからです。』この文面からは、クラウディウスがパウロをローマ帝国の市民権を持つ者だと知って助けたように書かれていますが、

実際はそうではありません。千人隊長は、パウロからそのことを聞かされるまで、パウロがローマ市民権を持つ者だとは知りませんでした。それは、パウロを鎖でつなぎ、鞭打ち刑にしようとした時のことです。この一件について手紙は一切触れていません。クラウディウスは自身の行いが良く見えるように話を若干修正しました。

千人隊長は、ことのいきさつを知ろうとパウロを最高法院に連れて行くと説明します。そして、使徒23:29でこう書いています。「ところが、彼が告発されているのは、ユダヤ人の律法に関する問題であって、死刑や投獄に相当する理由はないことが分かりました。」千人隊長は、ローマ帝国の法律のもとでパウロは無罪だとわかっていましたが、パウロを釈放しませんでした。この時点ではこれは良い判断でした。これによってパウロはローマ兵の看守の下に置かれたからです。とは言え、千人隊長が無罪だと結論付けたにもかかわらず、パウロはこの後5年以上もローマ帝国の捕われ人として過ごすことになりました。

使徒23:34-35 「23:34 総督は手紙を読んでから、パウロがどの州の出身であるかを尋ね、キリキア州の出身だと分ると、23:35 『お前を告発する者たちが到着してから、尋問することにする』と言った。そして、ヘロデの官邸にパウロを留置しておくように命じた。」フェリクス総督は、パウロの出身地を聞きました。やっかいな件を他の誰かに引き渡したいと思ったからかもしれません。しかしパウロの答えを聞くと、告発者が到着してから自分で尋問することにしました。その間パウロはローマ兵のもと、ユダヤ人の刺客から守られました。

VI. 結び

サムエル第二24:14 「ダビデはガドに言った。『大変な苦しみだ。主の御手にかかって倒れよう。主の慈悲は大きい。人間の手にはかかりたくない。』」この箇所は、ダビデ王が自分の罪の罰を選ぶ場面です。その叫びの中に彼の信仰が現れています。主のあわれみは大きいので、主の御手に自身を委ねるのが得策です。サムエル第二24章をすべて読むと、ダビデに選択肢を与えておられるとは言え、始まりから終わりまですべてを主が掌握しておられることがわかります。私たちが神を信じるという選択をすれば、神は私たちに祝福してくださいます。

自分の置かれた状況に神の愛をなかなか見出せないこともあります。それでも、神はあらゆる御業でご自身の愛を証明してくださいました。キリスト・イエスの十字架がその典型です。主の約束は真実であり、信頼できます。主を信じる者には、すばらしい約束を与えてくださいます。ローマ8:28は親しみ深い約束です。「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」

40人の人がパウロを殺す計画を立てたことで、パウロは危機に瀕したように見えます。その後、勇気ある甥がその陰謀を聞きつけ、パウロと千人隊長にそのことを知らせるという幸運に見舞われたように見えます。また、千人隊長の決断力のある行動によって、命拾いしたようにも見えます。しかし、このできごとをよく見てみると、ローマ8:28の劇的な例だということに気づかされます。パウロの運命を握るのは人ではありません。パウロは最初から最後まで神の御手の中に守られていました。暗殺の陰謀や甥の勇気、千人隊長のリーダーシップ、そのすべてに主が働いて

くださり、ローマで福音を告げ知らせるといふ念願にパウロを近づけてくださったのです。

主は、ローマで福音を伝えるといふパウロの願いがかなうことを使徒23:11ですでに約束しておられました。「その夜、主はパウロのそばに立って言われた。『勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証したように、ローマでも証しをしなければならない。』」パウロの安全を保証したのも、パウロの将来を決められたのも主ご自身です。パウロはローマへ行くと主がおっしゃったのですから、パウロはローマへ行くのです。



私たちはどこで何をしていても、神の御手の中にあります。神はすべての上におられる主だからです。詩篇135:5-6で、詩篇の作者はこう宣言します。「135:5 わたしは確かに知った／主は大いなる方／わたしたちの主は、どの神にもまさって大いなる方。135:6 天において、地において／海とすべての深淵において／主は何事をも御旨のままに行われる。」正しい人も悪い人も同様に神の御手の中にあります。主はすべての上におられる主です。ただし、すべてにおいて主を信頼する人には、数々の約束が与えられます。すべてにおいて神を信頼し、自分自身を神の御手に委ねると決心するなら、神との平和を得ます。この平和は、十字架上で成し遂げられたイエスの御業と復活によって可能となりました。

最後に、イザヤ書26:3-4にある勧めと約束を読みましょう。「26:3 堅固な思いを、あなたは平和に守られる／あなたに信頼するゆえに、平和に。26:4 どこまでも主に信頼せよ、主こそはとこしえの岩。」祈りましょう。

VII. 祈り